

□聖霊の第五の働き 照明

1. 聖霊の照明とは、どういう意味か？ それは、信者の思考を照らして、聖書に書かれた神のことばを理解できるようにして下さる聖霊の働きである。

(1) 聖霊の照明は、聖書に書かれた内容を超えるものではない。聖霊の照明によって、信者が新たな啓示を受けるということは、ない。神が人に明らかになさろうとした事柄は、すでに書かれた神のことば、聖書として私たちに与えられている。聖霊の照明は、聖書のことばを私たちに理解させるための働きである。

(2) 聖霊の照明は、人が生まれながらに持っている理解力を高めるものではない。人間の知性は、聖霊の照明においては何の関係もない。人間的に見れば、信者よりも不信者の方が知者は多い（I コリ 1：26）。しかし、聖霊の照明は、不信者には働かず、信者にのみ働く。そして信者が教育を受けているかどうか、博学か無知かに関係なく、信者は聖霊による照明を受けることができる。

2. 聖霊の照明は、信者にとって、なぜ必要なのか？ それは、人の生まれながらの思考は、霊的な事柄には働かない状態だからである。

(1) 人の生まれながらの思考の状態・・・ロマ 1：20～22 **神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。彼らは神を知っているながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、**

(2) 聖霊の照明を受けない不信者には、新約聖書は理解できない・・・I コリ 2：14
【直訳】生まれながらの人は、神の御霊のことを受け取りません。それらはその人には愚かなことであり、理解することはできません。なぜなら、それらは霊的に判別されるものだからです。

- 「神の御霊のこと」・・・1節では「神の奥義」、7節では「奥義のうちにある、隠された神の知恵」、10節では「神の深み」と呼ばれる。奥義とは、旧約聖書ではまだ啓示されていなかったことで、新約聖書で明らかとなったことである。よって、今は隠されていない。しかし、不信者には理解できない。

(3) 人の生まれながらの思考を暗くしているのはサタンである。よって、聖霊による照明の働きが必要である・・・Ⅱコリ 4:4 **彼らの場合は、この世（アイオン）の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。**

3. 聖霊の照明は、単に聖書のことばを理解させるものではない。時代（**ギ**アイオン）に流されずに信仰生活を生き抜くための「神の知恵」を、信者に与える。Ⅰコリ 2:5～16を見る。

(1) 5～9節 神の知恵と人間の知恵

- ① 5～6節 人間の知恵は、「この時代の知恵、この時代の支配者たちの知恵」である。
- ② 6節 この時代（アイオン）の知恵は、「**過ぎ去って行く**」→何ももたらさない、無に帰す、消え去る、滅びる
- ③ 7節 「**神の知恵**」は、世々（アイオンの複数形）が始まる前から神が定められておられた。神の知恵は永遠である。滅びない。
- ④ 8～9節 人間には、神の知恵を理解することはできない

(2) 10～11節 神の知恵と聖霊

- ① 10節 a 「**御霊によって啓示してくださいました**」・・・新約聖書で「啓示する」というとき、二通りの意味がある。
一番目は、新しいことの啓示。これは、預言者や聖書記者たちに与えられた。
二番目は、すでに教えられている真理を明らかに理解させるという意味での啓示（明らかにすること）。聖霊の照明の働きは、その二番目の啓示の意味
10節の「啓示してくださいました」・・・文脈から、二番目の意味であり、聖霊の照明の働きを受けた、ということ。
- ② 10節 b （直訳）「**御霊はすべてのことを探られる、特に神の深みを**」・・・
神の深み＝新約聖書で明らかにされた神の奥義
- ③ 11節 「**神のことは、神の霊のほかにだれも知りません**」・・・聖霊だけが神の奥義を知っておられる。聖霊によってのみ、信者はそれらを理解できる

(3) 12～16節 神の知恵との交信

- ① 12節 信者の能力・・・信者は、神からの霊（聖霊）を受けた。聖霊によって、信者は、神が私たちに恵みとして与えてくださったもの（神の知恵）を知り、理解することができる。神は、信者に知ってもらいたいことを、信者

が知ることができるように、その能力を、聖霊を通して信者に与えておられるのである。

- ② 13 節 (一部を直訳) **それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、聖霊に教えられたことばを用います。霊的なことを霊的なことに照らし合わせるのです。**・・・聖書に書かれた神のことばは、信者が聖霊の照明を受けたときに、信者の心の中で「聖霊に教えられたことば」となる。書かれたことばが、霊的なことばとなる。「霊的なことを霊的なことに照らし合わせる」とは、霊的なことばと、霊的な事柄とを照らし合わせる、ということである。信者は、聖霊から教えられた霊的なことばを、自分の内側やまわりで起きている霊的な事柄にあてはめて判断するようになる・・・これが、神の知恵との交信である。
- ③ 14～16 節 生まれながらの人 (14 節) と霊的な人 (15 節) との対比・・・生まれながらの人【=信者ではない人】は、神の深みを理解できない。霊的な人【=霊的に成長して大人になっている信者】は、すべてのことを受け取る。聖霊の照明に対して心を開いているからである。
- 15 節 **その人自身はだれによっても判断されません**・・・信者は聖霊の照明を受けて霊的なことばを受け取る能力がある。そして神の知恵は、人間の知恵によって教えられるものではないから、判断を求めているいろいろな人に尋ね回る必要はない。

(4) まとめ：I コリ 2：5～16 は、信者が聖霊による照明の働きを必要としていることを教えている。聖書は私たちがスピリチュアル・ライフを生きるための基盤であり、その聖書を理解させてくださるのが、聖霊による照明の働きだからである。

4. 聖霊の照明は、単に聖書のことばを理解させるものではない。信者を教え、導く働きを含む。ヨハネ 16：12～15 を見る。

(1) 12 節 聖霊から教えられることの必要性

「あなたがたに話すことはまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐えられません」・・・この箇所は、イエスが十字架にかかる前。聖霊がまだ降っておられず、聖霊の内住がないので、弟子たちはイエスが語ることを聞いてもそれを理解することができなかった。

(2) 13 節 聖霊が信者を教えるときの方法

① 導く・・・信者を「**すべての真理に導く**」。その前提は、信者が自発的に、書

かれた聖書のことば、啓示された真理全体に対して従うということ。信者は知れば知るほど、それに従うという責任が増す。何かを犠牲にしなければならない、何か好みのことを後回しにしなければならないとしても、従う、そのような姿勢が問われる。

- ② メシアに代わって語る・・・「聞いたことをすべて語り」、聖霊は、父なる神がイエスに語ったことを、イエスから受けて、そのまま語る。聖霊は自分から語るのではない。
- よって、聖霊ご自身は新しい啓示を与えることはしない。新しい啓示を与えるのは父なる神であり、その啓示は子なる神を通して与えられる。
 - 啓示における、聖霊の働きは2つある。
 - 1 番目は、「預言者の霊」としての働き。神の預言者や使徒たちの中において働き、神の啓示を彼らに明らかにすることである。
 - 2 番目は、「照明の働き」。これはすべての信者に対して働きかけるもので、啓示された神の真理を信者に理解させる働きである。もし、信者が求めるなら、聖霊は、必ずその人に照明の働きをしてくださる。
- ③ 信者に伝える・・・「あなたがたに伝える」。聖霊は、私たちの思いを照らし、私たちに教えてくださる。「伝える」というとき、信者の側もそれを受け取ろうとすることが必要である。よって、信者は、聖霊の照明を受けたいと願うこと、そして聖霊に従って信仰生活を歩むことが、前提である。

(3) 14～15 節 聖霊が信者を教える目的

- ① 14 節 メシアの栄光を現す
- ② 15 節 わたしのも＝メシアが父なる神から聞いた真理（8：40）を、メシアに代わって、信者に伝える

5. 聖霊の照明の働きは、聖霊降臨の前から開始した

ヨハネ 20：22 彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい」。

この時点では、イエスは復活しているが、聖霊はまだ降っておられない。「聖霊を受けなさい」と言われて、息を吹きかけられたのは、聖霊の照明を受けるためであった。復活のイエスが語ることばを弟子たちが聞いて理解できたのは、聖霊の照明の働きによった。